
十夜の幻空庭園 （第１夜～第５夜）散文詩集

山之内 白洞人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十夜の幻空庭園 （第1夜～第5夜） 散文詩集

【Nコード】

N8963F

【作者名】

山之内 白洞人

【あらすじ】

闇と、月光のシンフォニー、そして思いがけずに犯した原罪とは？

第1夜 夜の鳥

その夜、私は、とても疲れていた。

昼間、倉庫での、仕分け作業は、退屈を極めたし、しかも、欠勤者が多くて、
残業まで強いられたからだった。

薄汚い下宿に帰り着くと、とたんに、強い疲労感と、めまいが起こってきた。

そしてそのまま、泥のような、眠りに吸い込まれていくのだった。

私は暗い淵をさまよっていた。

なぜなのか？

やがて暗い夜がひしひしと押し寄せてきて、私はなおも歩き続けるのだった、

どれほど歩いたろうか？

闇は晴れて、樹林に囲まれた空き地に出ていた。

空き地には、なぜか、墓標が点々と立ち並び、わびしげに夜風に揺れているのだった。

一つの墓標に、私は吸い寄せられていった。
なぜなのか？

いとおしさがこみ上げて、涙が止まらなかった。

突然、頭上でぎゃあぎゃあと、鳥の鳴き声が、
あわてて振り仰ぐと、それは見たこともない、濃緑の大きな鳥だった。

「お前の、いとしい人の墓だな」

鳥は突然そう、私に語りかけてきた。

「なんだって？おれは天涯孤独、大都会に寝起きする一人の地上の旅人さ。いとしい人なんているもんか。」

私は自分でも驚くほど大声でそう、叫んでいた。

振り向くと、そこに白毛の少女が立っている。

「私のこと忘れたの？」

「一体何のことだ？」

しかし、突然、闇が全てを覆いつくし、私は漆黒の中で瞑目しているのだった。

どれほど経つたろう？

私はふと、我に帰った。手を広げると、暗闇の中、

手に何か触れた。いい香りの、食物、私は手探りで、それを、貪り食った。

とろけるような、芳醇な味。

しかし、次の瞬間、突然、

雲間は晴れて、白銀のような月光が射したのだった。

そして、どこからともなく、やさしい声で

「お前は何を食っているのだ？良く手もとを見ているがいい」

ふと我に返った私は、月光に照らされた、両手を見た。
血がべつとりと黒々と付いていた、そして地面には、

無残に食い散らかされた、死体が、散乱し、

そして、あたりを見回すと、そこには暴かれた、新墓がぽっかりと
口を開けているのだった。

第1夜 終わり。

第2夜 夜の彷徨

その夜、私は無性に、抑えがたい憧憬と郷愁にかられていた。

押さえがたい心の疼きとでも言ったらいいだろうか。

そうだ。

夜へさ迷いでしょう。

そんな思いが募ってきた。

私は一人、コートを羽織ると、冷たい夜の中へさ迷いだしたのだった。

そこは今まで見たこともない、町だった。

街灯が薄暗くともり、その灯は揺れていた、

そう、それはガス灯だった。

いったいなんで、こんな古めかしい町並みがあるのか？

レンガの歩道に、古風な家並みが続いていた。

人通りもなく、ひっそりと静まり返ったこの、町。

街路を抜けると、そこは、石造りの、橋が架かり、その先は暗い闇だった。

私は足早に渡ろうとその橋に近づいた。

すると後ろから、ひゅーっと、一陣の風が舞い上がり、振り返るとそこに、全身黒づくめの男が立っていた。

「その橋を渡るうつて言うのかい？」

男は確かにそう、言ったように思った。

しかし、よく見ると、その男に、顔はなかった。

「この橋は渡れないのですか？」

「その先に何かがあるか分かっているのか？」

と、男は言う。

目を凝らすと、はるか先に、朧な、映像が見えてきた。

「何でしょう、綺麗な花園がありますね？」

「いや、それは冥界へと続く、きざしだよ。」

男はそういうとふっと、消え去った。

橋の向こうに、一人の少女がたたずんでこちらを見ていた。

「さあ、いらっしやい、」とでも言うように手招きして、くすっと、微笑した。

私は背中にゾツとする悪寒を覚えて、足がすくんだのだった。

第二夜　　終わり。

第3夜 森の狩獵

夜だった。

私は一人石造りの古城の望楼に立っていた。

彼方には狐狩りのラッパの音がこだまし、勢子たちの音声もかすかに聞こえてきていた。

なぜここに私がいるのか？私には皆目分からなかった。

やがて騎士たちが、帰着する物音がして、マールホールでは宴会が始まったようだった。

そのとき、彼方からこんな歌が途切れ途切れに聞こえてきた。

「森へさ迷いでしょう。彼方まで、森の奥深く、

お前の渴きを癒す泉

はある。

さあ、森へさ迷いでるのだ。何をためらう？

そこにこそ、お前が焦がれる

姫君がいるのだ。

お前が求めた宝はそこにある。

賢者の石も、黄金も、珠玉も、

さあ、森へさ迷いでしょう。

をつむいでいる。」

泉は懇々と湧きでて、永遠の青春

その歌をきくと私は我を忘れて、

思わずこつ、叫んでいた。

「今行くよ、そうだ。森の中にこそおれの青春の宝が隠されていたんだ。」

私は憑かれたように、漆黒の夜の森へ飛び出していた。

暫く行くと、月光が雲間から顔を出し、一本の古木があつて、そこに駿馬がつながれていた、

私はためらわず、それにまたがり、草原を抜けて走らせた。

月光は夜露を光らし、虫達のさんざめきも、聞こえていた、

突然、雲がよぎり、あたりは闇に包まれた、

夜空に怪しげな鳥の鳴き声がけたたましく響いた。

私はどうしたのだろうか？思わず弓に矢をつがえると、

ひょうとばかりに、暗闇の空めがけて、射ていた。

どさつと、何かが落ちる音がして、獲物が落ちたようだった。

そのとき、雲が流れて、再び月光さんと夜の森を照らし出した。

馬の足元に何かが落ちていた、

馬から下りて近づき目を凝らすと、それは、
胸を一発で打ち抜かれた、嬰兒の骸だった。

第3夜 終わり。

第4夜 アイアンメイデン

再び夜だった。

私は、物狂おしい、焦燥にかられていた。
私の愛する妹がその日なくなったのだ。

14歳の花も恥らう乙女だった。

それがふとはやり病に罹りあつという間に憔悴しきり骸骨のようになつて痩せさらばえて、
事切れてしまったのだ。

なく涙も枯れ果てて私は、その骸にすがって夜どおし泣き明かすしかなかった。

私は一人、妹の顔に死に化粧を施し、納棺の準備をするしかなかった。

愛する妹よ、それは14歳のアフロディテだった。

神はなんとむごいことをするのか？

私は神をのろい、妹をどうか生き返らせてくれと、懇願した。

私はいつしか眠りこけていたようだった。

性も根も枯れ果てたためだろうか？

眠りは重ぐるしく、私は夢を見たようだった。

そこは、薄暗い地下室で、中世の異端審問所を思わせるような地下牢だった。

拷問器具が所せく並べられて、不気味だった。

私は何かに導かれるように、奥へ進んでいった。

突き当たりに、鋼鉄の少女像が安置してあった。

物悲しそうな鋼鉄の像、

そのとき、どこかから、

つぶやくような声が、

「鋼鉄の中には、真実がある」
と喋っているようだった。

私は近づき、よく見ると、

鋼鉄の少女像にはヒンジが付いていて、施錠されており、開閉できるようになっていたのだった。

私は辺りにカギを探した。

そして何気なくポケットに手を入れると、じやらんと、カギが手に触れた。

取り出して、鋼鉄像の鍵穴に差し込む。

するとぴたりとはまってかちつと、カギは開いた。

私はためらうことなくぎいっと、あけた。

開かれた鋼鉄の扉の向こうには、

何十本もの鋼鉄の串に刺し貫かれた妹の死骸が

血だらけでたたずんでいたのだった。

第4夜　　終わり。

第5夜 泉の精

夜が来た。

眠りにつくまでもなく、私は森をさまよっていた。
どれほど歩いたろうか？

程なく、木々の揺れ動く狭間に滾滾と湧く泉を見つけたのだった。
私は急にのどの渇きに襲われて我も無く、泉に駆け寄り、ごくごく
と一気に飲み干していた。
そして、ふと我に返って、水底を見透かすと、そこには綺麗な色の
小石がたくさん敷き詰められているのだった。

私は透き通った、水の中に手を入れると、その小石を掬い出した。
それは私の手のひらのなかでキラキラとゆがんだ光りを発してあた
りの木の間を照らし出した。
そしてわたしの周りの木も草も花も、急に多弁になり、囁きだすの
だった。

花はしおらしく、恋を語りだし、
木々は、雄弁に、神話を語る。

遠くにリンゴの木があり、私は惹かれるように、そこへ急いだ。

近づくのとたわわに実っていた。私は実を一つもぎ取る。

すると、リンゴの木は身をくねらせて、もだえるのだった。

「血のリンゴを取り、更に、それを食べるなら、永遠に呪われるよ」

そんな声がどこから聞こえてきたような気がした。

しかし、のどの渇きに耐え切れず、私は貪り食ってしまったのだった。

私は急にめまいを覚えてその場に蹲ってしまった。

薄れゆく意識の中で、私は、白いうさぎたちが飛び跳ねて泉に向かうのを見たような気がした。

どれほどか時がたったのだろうか。

私は泉のほとりに横たわっていた。

泉の中ほどに小島があり、そこに、白い衣をまとった少女が座っている。

その少女はこんな歌を口ずさんでいた。

「私は命の泉の精、ずっと前から、あなたを知っている。

でも、あなたは、本当はもうずっと以前から死んでいる。

命の水を飲んだから、こうしてはまだ生かされている。

でも、もし、その、水が枯れたなら、あなたは、再び、死の眠りに就く。」

私には何の意味かさっぱり分からなかった。

しかし、何だか、心に響き、遠い思い出の彼方に、過ぎ去った過去

の幻影を

見るような思いに囚われるのだった。

そうだ、私は再び眠りに就かなければならなかったのだ。

第5夜 終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8963f/>

十夜の幻空庭園 （第1夜～第5夜）散文詩集

2011年10月3日19時53分発行